れをとりまく地方民、それらの人々の自治的精神を除外しては考察することは不可能である。黄氏の解釋を以てしては茶賊鹽賊等國内的な叛亂に對する地方の義勇軍の成立過程は充分に説明することは出來ない。

㉒同右。

辟邪雙目追記——人物にしたがつて盼を轉ずるといふのは、わが國でいふ「八方にらみ」のことである。京都であれば西本願寺や南禪寺の虎、養源院の獅子などがそれである、近頃、その八方にらみの原理とでもいふやうなものを考へた人がある。『畫說』六月號に載つた西田正秋氏の「八方睨みの一考察」といふ論文がそれである。それによると顏を眞正面にし、兩眼を凝視するやうに書けば自然と八方にらみになり、どちらから見てもにらまれてゐるやうに、見えるといふのである。高句麗の壁畫や、ロプノールの織成錦や、もろもろの獸面意匠は正にその條件にあてはまるから別に問題はないやうであるが、そんならすべての「隨人轉盼」がたゞかうした圖法だけを意味するものであるかどうか。それは西田氏もふれてをられるやうに、たゞ單に心理學的な幾何學的圖法の意味ではない、やはり畫家の靈妙さをもふくめてゐるものと思ふ。畫家がみづから發明したかも知れないし、また師匠から傳へられてゐたかも知れないが、とにかくさういふ描法を知つてをつて描いた。描いた結果は妙手であるからにはねらつたとほりに轉盼した。そしてその轉盼は世評に上つたわけであらうが、その世評ばかりをねらつて轉盼の人物なり、獸形を描いたとは思はれない。やはり各寺院伽藍に要求したところのものは、その轉盼する兩眼の魅力であつたと思ふ。それはまことにことばどほりの魅力であつて、軒ばの壁面や門口の壁面にも適用されたのであらう。（みづの・せいいち）

廿二史劄記卷二十三、「宋史多國史原本。」

㉓内藤湖南博士「自發的革新の可能性」（新版支那論所收）二八三頁—二八七頁）參照。

（十月二十五日漢口陷落日稿了）